

中国のほんの話(67)

# 柏木如亭『詩本草』・『訳注聯珠詩格』

## ～江戸時代後期の漢詩人、デカダンスの漂泊詩人～

蔭山達弥

「柏木如亭と出会ってから、もう三十年近くになる。富士川英郎氏の『江戸後期の詩人たち』が最初の出会いの場だった。出会った途端、その自由奔放な生き方と清新な抒情詩に強く惹きつけられ、以来なんとか自分の手で如亭の生涯を復原し、詩の魅力を解き明かしてみたいと思うようになった。」(揖斐高『遊人の叙情 柏木如亭』あとがき、『遊人の叙情 柏木如亭』岩波書店、2000年所収)

何気なく手に取った一冊が、未知の領域に踏み込むきっかけになることはよくある。揖斐高氏にとって、富士川英郎氏の『江戸後期の詩人たち』との出会いがなければ、忘れられた詩人だった柏木如亭の生涯とその清新な魅力を明らかにすることはなかった。

「私が本書を初めて手に取ったのは、昭和四十六年の夏秋の交ではなかったかと思う。いわゆる大学紛争の影響で、変則的に七月に国文学専攻の大学院に入学したばかりの頃だった。国文学研究室の書棚にあった麦書房版の本書を借り出して読み始めたが、一気に読み終わった。当時の私は日本の漢詩や漢詩人についてほとんど無知であったにもかかわらず、深い感銘を受けた。(中略)しかし、本書において私自身がもっとも惹かれた詩人は、菅茶山ではなく柏木如亭だった。柏木如亭は、幕府の小普請方大工棟梁をつとめる豊かな家に生まれたものの、遊蕩に身を持ち崩し、詩に魅入られた挙げ句、家職を辞して遊歴の境涯となり、旅先の京都で窮死した詩人である。」(『解説 私的『江戸後期の詩人たち』頌』、富士川英郎『江戸後期の詩人たち』東洋文庫816所収)

柏木如亭の著書は、今岩波文庫で読める。『詩本草』(黄280-1)と『訳注聯珠詩格』(黄280-2)の二冊で、いずれも揖斐高氏の校注である。

『詩本草』は柏木如亭が、行く先々で口にした美食と、旅の記憶に漢詩を結合させた随筆である。清の袁牧の『随園食单』とフランスのブリア・サヴァランの『美味礼賛』に匹敵する魅力的な一品である。『詩本草』は柏木如亭(1763～1819)の遺稿として文政5年(1822)に出版された。江戸と京都での遊蕩生活において酒樓の料理を飽食した如亭が、両都の食味を体験的に評論した一段、『詩本草』の第三十八・『京の名品』の冒頭にある七言詩を揖斐高氏の書き下し文で引用する。



きょうぐうかえ きた すなわ  
京寓還り来つて便ち家に當つ 嵐山鴨水の旧  
生涯 老夫は是れ官を求むる者にあらず 祇だ  
愛す平安城外の花

『聯珠詩格』は宋末・元初の于済が三卷本として原撰し、同じ宋末・元初の蔡正孫が増訂・附注し二十卷本として、元の大徳四年(1300)に刊行した選詩集である。それを柏木如亭が抄訳し、『訳注聯珠詩格』と題して享和元年(1801)に四卷二冊として出版した。書名にいう「聯珠」とは、美しい表現を連ねた詩句の意であり、「詩格」とは詩の表現上の格式(形式)を意味している。如亭の後半生は、多く地方を旅して詩を教え、書画を揮毫して潤筆料を得るといふ、いわゆる遊歴の境涯のうちに過ぎていった。そうした生活におけるもっとも早い時期の遊歴先が信州中野である。信州中野に如亭が寓居を定めたのは、三十三歳の寛政七年であったと推定される。如亭はここに晚晴吟社という詩社を開き、近在の人々を集めて詩を教えた。その晚晴吟社での詩作講義のテキストとして用いられたのが『聯珠詩格』だった。如亭は晚晴吟社の門人たちを前に、『聯珠詩格』の一首一首を俗語を用いて「訳注」してゆくことで、詩の読解や作詩の勘所を説き示していった。

『訳注聯珠詩格』から、李白の詩『山中の人に答ふ』を書き下し文と如亭の話し言葉を使った訳で比較対照する。

(書き下し文) 余に問ふ 何の意ぞ碧山に棲むと 笑ひて答へず 心自ら閑なり 桃花流水杳然として去る 別に天地の人間に非ざる有り  
(如亭の訳) どういうきで やまおくにすむと おれにきくから にこにこもので あいさつもせぬぐるみ ころろがしげんとひまだ もものはながながれちつて とほくへいくところ べつなせかいがあつて うきよとはちがつたものさ

かげやま たつや(教授・中国文学)